

古民家移築の記録

待望の長屋門が出来るまで

長屋門を解体した材料があると聞き、自宅の裏庭に建ててみることにした。
土間にレストアしたバイクを置き、居酒屋風の憩いのスペースを作る……
そんな夢を実現する一大プロジェクトである。

文と写真／柳原三佳

■ After



●移築を終えた長屋門。瓦屋根だったものをガルバリウム鋼板葺きとしたのは、地震対策で上部構造を軽くするのと予算低減というふたつの目的がある。写真は2012年2月、千葉県にこの冬初の積雪があったときのもの。

■ Before



●そもそもこの長屋門は千葉県山武市に建っていたものだった。長屋門とは、門の両側に部屋がある長屋風の門のこと。この解体材と偶然出会ったことが移築プロジェクトのきっかけだった。写真は解体前の姿である。

言葉に出せば『夢』叶う？

「長屋門をガレージにしたいなあ……」
夫がそんな突拍子もないことをつぶやくようになったのは、今から15年ほど前のことだった。

長屋門といえば、武家屋敷の表門。その名のとおり「長屋」と「門」が一体化した建物だ。大きな扉のついた門の両サイドには門番などの家臣を住ませるための部屋がしつらえられ、明治維新後は名字帯刀を許された豪農や庄屋なども好んで建てるようになったという。

そういえば、当時夫が借りていたガレージ（通称・サティアン）からは、水田越しに農家の立派な長屋門が見えていた。おそらくその景色が気に入っていたのだろう。「あの長屋門、売りに出ないかなあ……」その言葉は徐々に具体性を増していった。

正直言って当初は、「なんで『門』なの？」と、夫の言葉の意味が理解できなかったが、そんな私の気持ちをガラリと変えたのは、ある日、長屋門を改築した

おしゃれなギャラリー&カフェを訪ねたことがきっかけだった。吹き抜けの高い天井には堂々とした太い梁、漆喰の壁には古民具と和の小物がよく似合う。そこにいるだけで、ゆったりとした、落ち着いた雰囲気を感じる事ができるのだ。

『なるほど、長屋門って、こんな使い方もあるんだわ。ここで趣味の時間を楽しんだり、友達を呼んでお酒を酌み交わすのも悪くないなあ〜』

今思えば、私も小学生の頃から古民家が好きだった。夏休みの工作に、合掌造りを作ったこともあった。もともと古いものが大好きな私は、すっかりその空間にはまり、いつの間にか『長屋門ガレージを建てたい』という夫の夢を、あちこちで口にするようになっていたのだった。

瓢箪から駒？

出合いとは、ひょんなところで待ち構えているものだ。

あれは2010年の秋。私が長年通い続けている書道の教室でお稽古が終わった後、なぜか「古民家」の話題が飛び出した。そこで、いつものように、「うちも古いものが大好きで、主人は、長屋門を移築したいなんて言ってるんですよ〜」そんなおしゃべりを始めていると、隣に座っていた社中のカズエさんが、突然こう切り出したのだ。

「えっ、長屋門ですか？ 実はずちの主人、古民家移築の仕事をしています。ちよと今、倉庫の中に、解体した築150年くらいの長屋門の材が保管してあるって言ってましたよ」

「え、本当ですか？ なんて偶然でしょう。一度見に行つていいですか？」

「どうぞどうぞ。ぜひいらしてください」と、出来すぎた物語のようないきさつで、私たちは早速、守門という会社の社長、つまりカズエさんのご主人と会うことになったのである。

●'11年9月24日。台風一過の青空の下、長い梁がクレーンで吊り上げながら組み上げられていく。天候不順で工事がストップしていたが、翌日の上棟式に間に合うように、作業は一気に進められた。



●'11年4月に守門の駐車場で行われた仮組みの模様。解体してバラバラになった材木をいったんこうして組み上げ、虫食いや朽ちた材木をチェック。使えない部材は新たに刻んだものと取り替え、組んでいく。



●'11年3月、我が家の裏庭で、古民家再生プロジェクトが本格的にスタート。ポンコツバイクやクルマを強制撤去。

●'11年9月25日、上棟式直前まで棟上げの工事は進められていく。



●裏庭をコンボで地ならしをするも、この後すぐに雑草が生い茂ってしまった。当初は自己資金で建てようと考えていたが、ローンで購入した土地に抵当権が設定されている関係で金融機関の承認が取れず難航。残債の繰り上げ返済を行って抵当を外し、新たに建設金を借り入れることで切り抜けた。この手続に時間がかかり、本格的な着工が先延ばしになったのだった。



●'11年9月25日は上棟式。さわやかな秋晴れのもと、大勢のご近所さんがお餅を拾いに来てくれた。家族3人で白い足袋をはいて上まで登り、お餅を投げたのだが、ほんとに楽しかった～！



●'11年9月、基礎工事が急ピッチで進む。母屋の基礎がおもちゃに見えるほど、頑丈なベタ基礎が出来上がった。

まず確認すべきことは、解体されている長屋門が、実際に組み立てたときどんなサイズになるのか、そして、それは我が家の裏庭に収まるのか？ ということだった。
数日後、早速、社長から返事があった。その答えは、なんと「ほぼびつたりと収まります！」というものだった。
そのとき、私たちの意思はもう固まっていたのかもしれない。こんな「物件」、いざ探そうと思っ、なかなか出会える代物ではない。この不思議な『縁』を楽

しむのも、これまた乙なもの……。
「よし、思い切って移築してみるか！」
2010年、大晦日の一大決心だった。
**ユニック車で
ポンコツを強制撤去**

こうした稀有なきさつを経て、我が家の裏庭に移築が決まった長屋門だが、ここから基礎工事にかかるまでには、気の遠くなるような一大作業が待ち受けていた。

実は、建設予定地である裏庭には、夫が20年にわたってため込んできたポンコツ（本人だけは「宝」、「材料」だと主張するのだが？）のバイクやクルマが山積みになっており、十数年の歳月は、それらを見るも無残な姿に変えていたのだ。孟宗竹がバイクのタンクを突き破り、葛の頑丈なつるは、ホイールにこれでもかと絡みついていて、70年代のBMWのトランクからはうるしの木が生え、ポーターキャブの床からはキノコが……。

しかし夫は、なかなか重い腰を上げようとはしなかった。長屋門を建てると決めたはずなのに、ポンコツの撤去を迫ると、駄々っ子のように逃げてしまうのだ。見るに見かねた守門の社長が、ユニック車と人員を派遣してくれることになったが、巻きついたつるを切断しておかなければ、吊り上げることもできない。

仕方がない。私は空き時間を見つけては、鋸と鋏を持ってポンコツの藪の中に入り、バイクに絡みついた植物の切断作業をおこなった。木の枝が何度目に刺さったことだろう……。

強制撤去が行われたのは、2011年3月のこと。2t車が3往復し、建築予定地はおかげさまでようやく更地になったのだった。

しかしこの時期、東日本大震災が発生し、多くの家が津波で流される映像を目の当たりにした。また、関東地方でも余

●天井の梁を目立たせるため、屋根の内側は塗装をせず、杉板が見えるように施工した。



●'11年10月29日。長屋門の顔である大きな櫺の扉に、朱色の塗料が塗られていく。取りつけられる日が待ち遠しい。



●'11年11月8日。ロフトに上るために、守門の古道具部門でゲットしておいた「階段筆筒」が、運ばれてきた。早速、赤い門の前に置き、足りない分は大工さんに作ってもらおうことに。



●'11年9月30日。屋根の形が浮かび上がってきた。向かって左側のスペースは吹き抜けに、真ん中と右側にはロフトを作る予定。梁がたくさんあるので、頭をぶつけてしまいそうだが、隠れ家的空間を作ろうと計画。ちなみにこの建物は、本来の長屋門の奥行きを1間半延長し、土間スペースを広く取ることに。

●'11年10月3日。屋根が出来てきた。断熱材には、親しい量屋さんから出てくる廃材のスタイロフォームを再利用して使用。これはものすごい断熱効果だと、大工さんも絶賛！



震が続く中、「本当に、こんな時期に長屋門なんて移築してよいのだろうか」と急に不安に襲われたこともあった。しかし、「大丈夫です、関東大震災にも耐え

抜いた建物です。今回建てる場合も、耐震設計は万全の体制で臨みますので」という社長の言葉を信じ、計画は着々と進んでいった。

●'11年10月18日。壁に防水シートが貼られ、屋根が完成すると長屋門らしくなってきた壁板も一部貼られているのがわかる。

4月には守門の駐車場で、解体された長屋門の「仮組み」が行われた。昔の大工さんが墨で付けた「イ・ロ・ハ」という印を頼りに、現代の大工さんたちが、太い柱を組み上げていく。まさに、時代を超えた「再生」だ。そして、朽ちたり、虫食いのひどい材木は、代わりのパーツが刻まれ、新しいものと入れ替わっていくのだ。

図面ではなく、初めて実際に組み上げられた構造物を間近で見るときは、想像以上の大きさと、立派さに驚かされた。この大きな門を、昔は馬に乗ったお侍さんたちが出入りしたのだろうか……この骨組みが、今後

●長屋門の正面に向かって左半分は、母の居室になる。床下にはやはりスタイロを入れ、入念に断熱。



●壁の断熱にはグラスウールを使用。柱が露出する真壁なので、この段階で配線工事を行っておく。後から通すことはできないのだ。



●屋根裏にはこんな空間が出現した。屋根裏の部屋は、屋でも真っ暗！この部屋の名を、「座敷牢」にするか「独居房」にするか、「瞑想室」にするかを思案中のところ。



古民家移築の記録

待望の長屋門が出来るまで

秋晴れの空の下、我が家の庭にはご近所から100人近い人たちが集まり、餅を投げるたびにそれを競争しながら拾おうとする楽しそうな歓声が響いた。大工の棟梁は「今日の酒は旨いですねえ」と満足そうに言った後、「こんな本格的な上棟式もこれで最後になるでしょうなあ」と、少し寂しそうにつぶやいていた。

その後も、工事は順調に進み、11月の末にはほぼ建物が完成。内装工事も終わり、土間が完成すると、夫は早速、レストア済みのメグロをその中央に陳列した。ふと気づくと、メグロの隣には娘の愛車・スズキのバンバン50も鎮座している。父娘そろっての旧車好き、やはり血は争えないものだ。さらに夫は、屋根裏に『大

どんなふうに変身していくのか……。いろんな夢を膨らませながら、私たちはパズルを組み合わせるように、土間の大きさや間取りなどのレイアウトや仕様について、検討に検討を重ねていったのだ。

メグロとバンバンが鎮座する土間

古民家、増築、母屋の土地へのほんの少しの越境……、建築確認申請が下りるまでは、さまざまな条件をクリアするためには少し時間を要したが、九月に入ってからようやく本格的な基礎工事が始まった。大きな地震がきても倒壊しないようにと、木造建築としてはかなり頑丈なベタ基礎が打たれたようだ。

ここからは、ものすごいスピードで工事が進んでいった。あつという間に骨組みが出来上がり、9月25日の大安には上棟式が華々しく行われた。これは、柱や梁などの構造が完成して、屋根の一番上に「棟木」が渡されたときに、建物の無事を祈って行われる儀式で、新興住宅地で育った私たち夫婦にとっては初めての体験だった。



●内装もほぼ完成。昭和10年生まれの母の、年代物のひな人形が古民家によく似合う。



●古民家に合わせて照明器具もレトロ系で統一。ネットオークションでノブ碍子と磁器製ローゼットを競り落とし、碍子引き配線とした。これは増築部分の天井に電線を通せるスペースがなかったこともある。電球はの4WのLED球を採用。写真の色とはかなり異なり、柔らかな電球色で裸電球の風情を十分に再現できた。

●コレクションしていた骨董の朝顔を活用した男性便所。ただし、現在の配管には適応しておらず、排水口を研磨で広げて寸法を合わすという大改造を行っている。正面には実家の玄関の装飾に使われていた竹を再利用。



●最近には月に1~2回のペースで、友人・知人を招いての宴会を楽しんでいる。こだわりの居酒屋風カウンターも大活躍。

●土間の階段筆筒わきには、母屋の玄関に置かれていたメグロS7が引っ越してきた。ようやく安住の地を見つけたかのようでもある。



●屋根工事が進行。ルーラーフィングシートの上に鉄板が貼り上げられていく。



●サッシの取り付けが終わると左官工事に取りかかる。コテさばきは見事のひと言。



●塗り壁用のボードが貼られる。このボードは難燃材。



●ネットで注文したダルマストーブを設置。薪をくべながらゆっくり眺めるのが楽しみに。性能を心配していたが、まったく問題なくよく燃える。ストーブ周りには熱を遮断するため、漆喰の中に石を埋め込んでみた。煙突は壁に開けた角穴にメガネ石を入れて遮熱してある。



●'11年11月15日。外まわりの左官工事が終わり、足場も外され、長屋門の勇壮な外観がすっきりと見渡せるように。これから夢の「居酒屋風キッチン」造りに向けて、本格的に内装工事がスタート。



●'11年12月15日。居酒屋風掘りごたつカウンターの建設が、着々と進んでいる。この部分の内装は本誌でもおなじみのウッディハマーが担当。

●土間のしっくい壁が完成。内装工事も着々と進み、居酒屋風カウンターも仕上り間近



人の隠れ家』的な空間（通称・座敷牢）を作り、そこに昔のバイク雑誌や鉄道雑誌をどっさり運び込んで、ときどき籠っている。
「長屋門をガレージにしたいなあ……」というあの呟きから15年。夫の突拍子もない夢は、こうしてようやく実現の日を迎えたのだった。

匠の技で「使い捨て時代」に逆行 古民家再生にかける男たちの心意気 「末代まで残る 本物の家を残したい」

『消えゆくつかしき住居 平成の世にもう一度』千葉県東金市の国道沿いを行くと、レトロな水車のわきに置かれた大きな看板の文字が目飛び込んでくる。株式会社守門---。これまでに移築、再生させてきた古民家は約60棟に上る。「100年も200年もの間、人々の暮らしに役立ってきた立派な材木を捨て去るわけにはいかない！」そんな信念で古民家再生に取り組む男たちの思いを聞いた。

文と写真／柳原三佳



株式会社 守門

〒283-0066 千葉県東金市南上宿38-29 ☎0475-55-6763 Fax0475-55-6865
http://www.kominkasaisei-sumon.com/



●左から、石塚社長、大塚会長、上村一級建築士。

昨年秋、石塚社長はロサンゼルスである建物を見て驚いた。なんと、その建物は日本から運ばれてきた、本物

夢は古民家で
海外進出

「基本的にはきちんと計算して、耐力壁を入れたり、見えない部分で金物を使うなどしています。基礎そのものも、今はコンクリートを打ちますので、ご安心いただけます」

「基本的にはきちんと計算して、耐力壁を入れたり、見えない部分で金物を使うなどしています。基礎そのものも、今はコンクリート

「現代の住宅は1日で棟上げが終わりますが、古民家の場合は1本1本、当時の大工によるホゾ組みを再現しながら行うため、時間がかかります。その切り口をよく見ると、昔の人の技術の高さに本当に驚かされます」
一方、地震が相次ぐ昨今、やはり顧客ともども気になるのは耐震強度だろう。上村さんは語る。

古材でも耐震強度は万全

現在、守門で設計等を担当するのは、一級建築士の上村隆さん（50）だ。上村さんもこの仕事に携わり、ホゾ組みと呼ばれる昔の大工の卓越した技術に魅せられたひとりだ。「現代の住宅は1日で棟上げが終わりますが、古民家の場合は1本1本、当時の大工によるホゾ組みを再現しながら行うため、時間がかかります。その切り口をよく見ると、昔の人の技術の高さに本当に驚かされます」

実は、石塚さんが守門の社長になって初めての古民家移築が、前出の「長屋門」だったのだ。

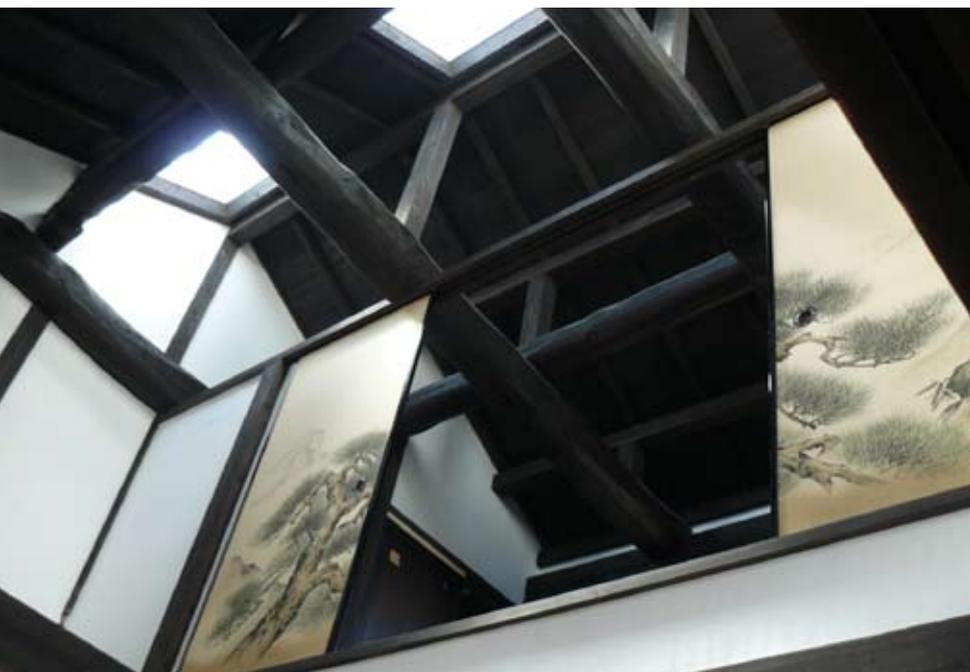
くいらないからくいらなくとこころへ

「今から30年ほど前のことです、解体された立派なかやぶきの家が、某市のクリーンセンターのすぐ横に掘られた大きな穴にどんどん投げ入れられ、燃やされていくのを見たんです。昔の人が刻んだ材木の組み方は、ものすごく手が込んでいて素晴らしい、そもそも材木自体も今とはまったく質が違う。でも、焼けてしまつたら二度とは戻らないのです。そ

れを見たとき、『あー、もったいない』と、心底思いました。そして、『よし、それならくいらなくとこころから、くいらなくとこころへ、古民家を引き継いでいく商売をしよう。そう思ったのが、この仕事を始めるきっかけでした』
そう語るの、守門の会長・大塚忠彦さん（65）だ。大塚さんは新潟県の守門村（現在は魚沼市）の生まれで、会社名は故郷の名前に由来する。
当時は、千葉県の大原市で骨董店を営んでいたのだが、以来、「古民家」の移築という、大きな事業にも乗り出すことになったのだ。取り扱っている古民家は、そのほとんどが新潟の上越地方のものだ。長い年月、豪雪に耐え抜いた太い柱と梁を持つ民家は、手入れ次第でまだ数百年はもつといわれている。しかし、過疎化が進んだ村では、主を失った空き家がやがて廃屋と化していく。まずは

そうした物件を押さえて、古民家を再生したいというお客さんに現場を直接見てもらう。そして気に入れば、解体、搬送し、次の場所へ再び組み上げ、新たな命を吹き込むのだ。「これまでに60軒ほどの古民家を再生しましたが、おかげさまでクレームなどはありません。そもそも古民家にはひび割れや虫食いがつきものですが、古民家が好きな人はもともとそうところが苦にならない方々なので、有難いですね」
そんな大塚さんが60歳を機にそろそろ引退しようかと考えてきたとき、「なんとしても古民家再生の灯を絶やしたくない」という男が現れた。それが、長年の飲み仲間でもある、現社長の石塚信寿さん（53）だ。
実は、石塚さんも古民家には特別な思いがあったという。
「私の育った家は茨城県の、いわゆる蘆薈の

甦る古民家



●千葉県市川市に建築中の物件内部。吹き抜けの天井に太い梁の存在感が光る。古い襖や建具など施主のコレクションが随所に生かされている。



●千葉県勝浦市の物件。この古民家が雑誌に掲載されると、大きな反響を呼んだという。



●建築中の古民家の入り口。この家は敷地面積に合わせて、解体前の古民家の約半分の大きさで設計された。



●駐車場では新潟から運ばれてきた古民家の仮組みが行われていた。年内には栃木県の益子町で再生の予定だ。



●守門の社屋の2階に再現された『昭和の家』。隣の『戦争資料昭和レトロ館』には、会長が30年かけて収集した戦争資料などが展示されている。



●『日本の古民具』コーナーには、古筆筒や長火鉢、古民家に使用されていた建具などが販売されている。

千葉県内の施工例の中からいくつかの物件を紹介しよう。

市川市で建設中の古民家は、土地の広さと形に合わせて、元の古民家(100坪)を半分以下に分割したうえで施工した。気に入った古民家をそのままの形で移築できない場合は、骨組みだけはしっかりと押さえながら建物を小さくしていくなど、さまざまな方法がある。

守門では年内にも、千葉東金道路の山田出口を降りてすぐのところ、古民家の展示場を作る予定だという。「とにかく古民家の素晴らしさをぜひ多くの人に知ってもらいたいですね。展示場が出来上がったら、ぜひ見学にいらしてください。お待ちしております」

「潟から海を渡る古材」というプランを考えてみたいと思いました」

守門という会社を含め、合計8つの会社の代表を務める石塚さんのこと、海外で日本の古民家が再生される日も、そう遠くはないのかもしれない。

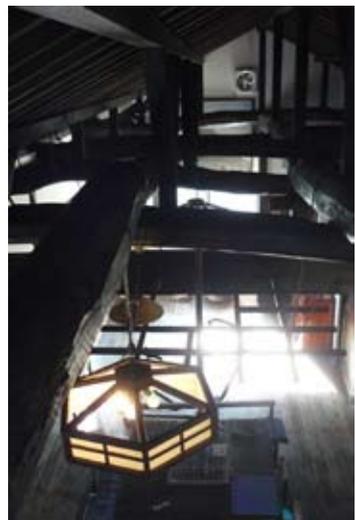
守門のHPには、古民家再生の魅力についてこう綴られている。

『深山の雑木で、そのくねくねと曲がったブナやナラ、栗の木をうまく組み合わせた昔の職人芸。そして、百年も二百年もの間人々の役にたつて来た木材を捨て去る訳にもいかずもう一度世に出て人々の為に頑張るに貫おう。そんな気持ちでこの仕事をやっております』

「とにかく、一度建てたら末代まで住み続けられる、本物の家を建てたいですね。使い捨て時代に逆行して、こだわってこれからも頑張っていくつもりです。化学製品だらけの近代建築より日本の地が育った木をそのまま無垢で使った家屋のほうが健康によいはずだと信じております」



●大塚会長の自宅わきに建てられた古民家ショールーム。囲炉裏風の手作りテーブルが語らいの場に。



●ショールームの小屋裏部屋から見下ろした居間。照明器具にもこだわりが。



●古民家ショールームの玄関わきに飾られたひさご型のオブジェ。